

伏見城跡

2008年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

伏見城跡

2008年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび社員寮新築に伴う伏見城跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

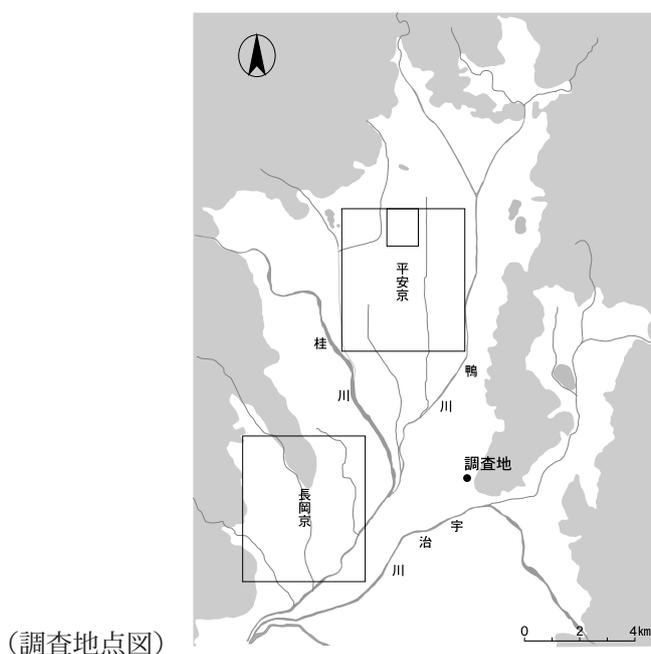
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 20 年 1 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|-----------------------------------------------|
| 1 遺 跡 名 | 伏見城跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市伏見区桃山福島大夫西町1-2番地 |
| 3 委 託 者 | 株式会社京都銀行 取締役頭取 柏原康夫 |
| 4 調査期間 | 2007年9月25日～2007年11月28日 |
| 5 調査面積 | 597 m ² |
| 6 調査担当者 | 平田 泰・布川豊治 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「丹波橋」「中書島」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 遺構毎に番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 16 本書作成 | 平田 泰・布川豊治 |
| 17 執筆分担 | 3-(3)を布川が、他を平田が執筆した。 |
| 18 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・近藤章子・山口 眞 |



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の経緯	1
(2) 位置と環境	2
(3) 周辺の調査	3
2. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 検出遺構	9
3. 遺 物	15
(1) 遺物の概要	15
(2) 土器類	15
(3) 瓦 類	16
4. ま と め	22

図 版 目 次

図版1	遺構	1 調査区全景（東から）
		2 調査区西側全景（北東から）
図版2	遺構	1 石組側溝（北東から）
		2 石垣基礎（北東から）
図版3	遺構	1 礎石土坑1（東から）
		2 礎石土坑2（北東から）
図版4	遺物	土器類・軒丸瓦
図版5	遺物	軒丸瓦・飾り瓦
図版6	遺物	軒平瓦

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：800）	2
図3	調査前全景（東から）	3
図4	作業風景（西から）	3
図5	周辺調査位置図（1：10,000）	4
図6	基本層序柱状図（1：40）	9
図7	調査区遺構平面図（1：200）	10
図8	石組側溝実測図（1：80）	11
図9	石垣基礎実測図（1：100）	12
図10	礎石土坑1実測図（1：80）	12
図11	礎石土坑2実測図（1：80）	13
図12	土坑7断面図（1：40）	13
図13	出土土器実測図（1：4）	15
図14	出土瓦類拓影・実測図1（1：4）	17
図15	出土瓦類拓影・実測図2（1：4）	18
図16	出土瓦類拓影・実測図3（1：4）	19
図17	出土瓦類拓影・実測図4（1：4）	20
図18	出土瓦類拓影・実測図5（1：4）	20

表 目 次

表1	遺構概要表	14
表2	遺物概要表	21
表3	掲載土器一覧表	23
表4	掲載瓦一覧表	24

伏見城跡

1. 調査経過

(1) 調査の経過

調査地は、京都市伏見区桃山福島大夫西町1-2番地にあり、桃山丘陵の北西縁辺で国道24号線と丹波橋通が交差する南東、JR奈良線の西側に位置している。敷地面積は約1,800㎡で、この敷地内に社員寮の新築が計画された。当地は伏見城下の大名屋敷が配置されていた一角にあつて、京都市文化財保護課によって試掘調査が実施された。調査の結果、礎石、瓦溜り、溝などを良好な状態で検出したことから本格的な発掘調査の必要が指導され、当研究所に発掘調査が委託される運びとなった。

調査は、建物が建築される位置に2箇所の調査区を設定して実施した。2007年9月25日から機械力による盛土層の除去作業を開始し、順次、遺構の精査検出、掘り込み、写真撮影、図面作成などを実施した。同年11月19日からは遺構の掘り抜き、土層の断割りなどの補足作業を経て、11月25日から調査区の埋戻し、器材の撤去作業を行い、11月28日に現場での作業をすべて終

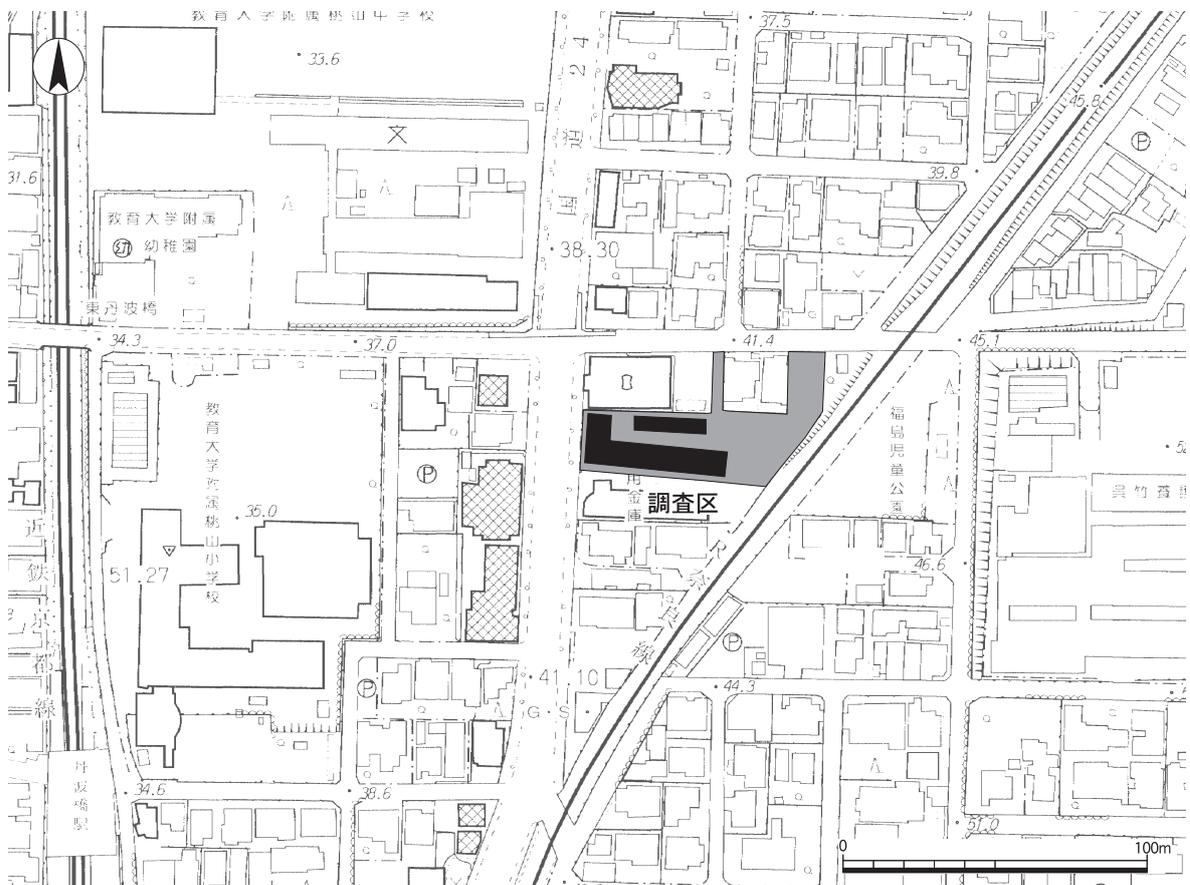


図1 調査位置図(1:2,500)

了した。11月29日からは遺構と遺物の点検、洗浄、実測などの報告書作成に向けた準備作業を行い、報文、挿図、写真図版などの作製を経て報告書を作成、この刊行をもって本調査に関わるすべての業務を完了した。また、調査中の11月10日には現地説明会（参加者約300名）を開き、調査成果を公表している。

（2）位置と環境

桃山丘陵は第三紀末から第四紀始めの海成層である大阪層群からなっており、その南側を宇治川、東側は山科川で区切られ、西側は鴨川と合流した桂川に向かって緩やかに傾斜している。

調査地はこの丘陵の西側斜面に位置する。丘陵地とその周辺には貝塚の発見された泰長老遺跡、散布地である金森出雲遺跡などの縄文時代の遺跡があり、宇治川に近い南西部には方形周溝墓が発見された弥生時代中期の桃陵遺跡がある。古墳時代の遺跡は丘陵東斜面にある中期の黄金塚古墳、後期の桃山古墳群がある。飛鳥時代から奈良時代の遺跡は御香宮廃寺、板橋廃寺などがある。

平安時代前期には桓武天皇柏原陵が造られ、後期には橘俊綱の伏見亭の存在が文献で確認できる。しかし、伏見城跡としての調査で、平安時代前期から中期の遺構・遺物が多く検出されており、既に前期から貴族層の山荘、別業の地となっていたとみらよう。

桃山丘陵とその周辺を大きく変えたのは、天正20年（1592）の豊臣秀吉による指月城建設による。当初は隠居屋敷として建設したが、文禄3年（1594）には諸大名への動員令を下し、城下を備え、河川や街道の整備を含めた本格的な城郭の築城となっている。しかし、文禄5年（1596）の伏見大地震によって城郭と城下は壊滅的な被害を受けている。城地を木幡山に移した再建は早く、翌慶長2年（1597）には完成を果たしている。秀吉は慶長3年（1598）に死去したが、政権継承の混乱で慶長5年（1600）に関ヶ原戦が勃発、その前哨戦でほとんどの建物が消失している。戦後まもなく徳川家康による再建が始まり、慶長8年（1603）には征夷大將軍宣下をこの城で受けている。元和元年（1615）の大坂夏の陣以後は城郭としての役割を終えて、元和9年（1623）

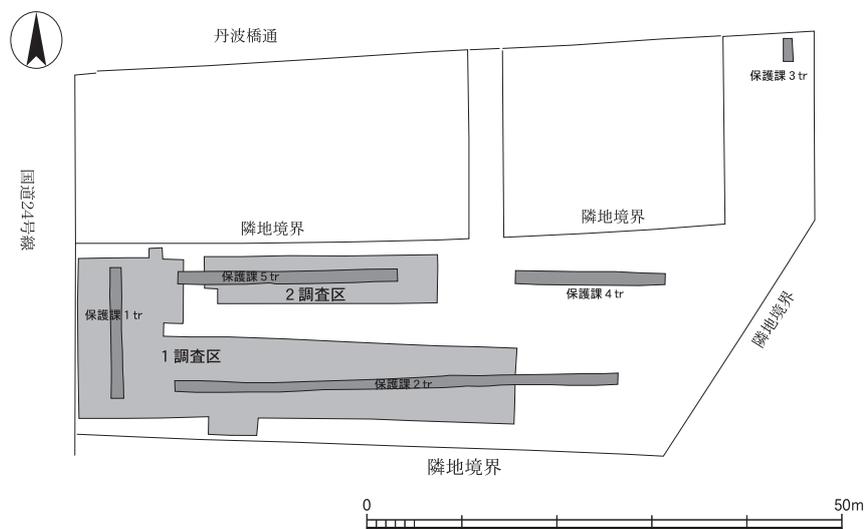


図2 調査区配置図（1：800）



図3 調査前全景（東から）



図4 作業風景（西から）

の徳川家光の三代将軍宣下の後には廃城となっている。その後の伏見は、城郭と大名屋敷はなくなったものの、前代からの街道や河川の整備の遺産が引き継がれ、交通運輸の拠点として幕府の直轄地となり、江戸時代を通じた商業都市として発展を果たした。

参考文献

- 京都市『京都の歴史4』桃山の開花（株）学芸書林 1969年
京都市『京都の歴史1』平安の新京（株）学芸書林 1970年
京都市『京都の歴史5』近世の展開（株）学芸書林 1972年
横山卓雄『平安遷都と鴨川つけかえ』法政出版（株） 1988年
京都市『史料京都の歴史』第16巻 伏見区（株）平凡社 1991年
横山卓雄『京都の自然史』（株）京都自然史研究所 2004年
『京都市遺跡地図台帳』[第8版] 京都市文化市民局文化財保護課 2007年

（3）周辺の調査

調査1は、昭和52年度（1977）に桃山水野左近町69番地で実施された。調査では桃山時代から江戸時代の土坑、井戸、溝などを検出している。出土遺物は土師器皿、土師質土器壺、陶器椀・皿・鉢、金属製品釘・毛抜、銭貨（寛永通寶）、瓦類がある。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・金箔軒丸瓦などがあり、水野氏の「沢瀉紋」や黒田氏の「餅紋」などの家紋を文様にした軒丸瓦が出土している。

調査2は、昭和57年度（1982）に桃山毛利長戸東町8番地の府立桃山高校で実施された。検出した遺構は桃山時代の土坑3基、江戸時代の土坑がある。出土遺物は桃山時代の金箔軒平瓦、江戸時代の染付磁器などがある。

調査3は、桃山町伊賀40番地他の橘女子学園で昭和57年度（1982）に実施された。検出された遺構は桃山時代から江戸時代の堀状遺構、溝、建物、柵列、築地状遺構、土坑などがある。出土遺物は古墳時代から平安時代の土器類、伏見城期の土師器皿、陶器皿・椀・播鉢・壺、明染付椀・皿などがある。特に元末明初とみられる青花唐草文獣耳壺の出土は特筆される。遺構の時

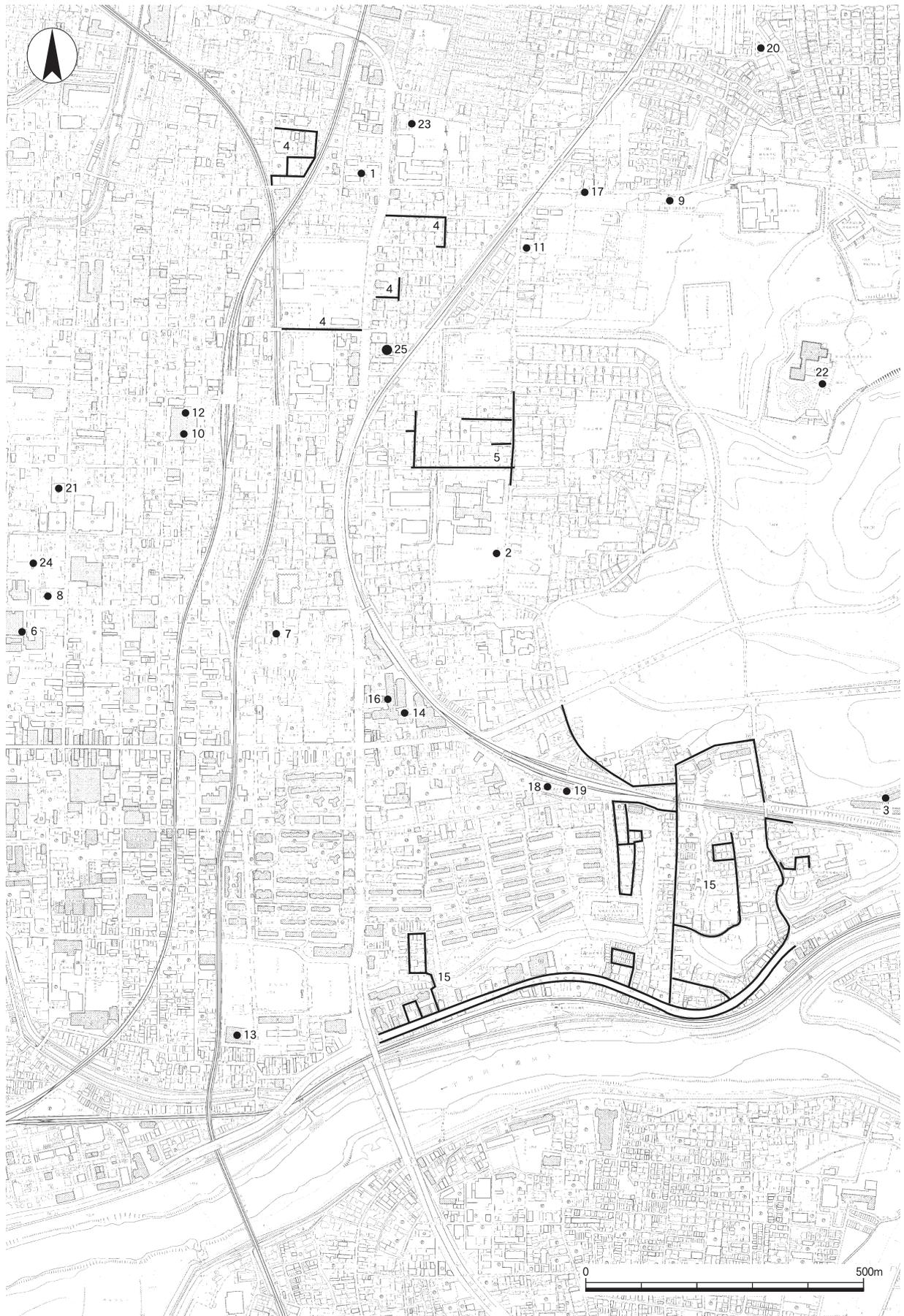


図5 周辺調査位置図 (1 : 10,000)

期は瀬戸・美濃系の陶器が多い築城期以降と唐津焼が増加する関ヶ原以降の2時期に分けられている。

調査4は立会調査で、桃山水野左近西町～井伊掃部東町地他昭和58年度(1983)に実施された。国道24号線から西に下がる丹波橋通南側で桃山期の東西方向の石組溝が検出され、道路に沿った石組側溝の一部とみられている。

調査5も立会調査で、桃山町泰長老～板倉周防地先で昭和58年度(1983)に実施されている。調査では桃山時代の連続する溝、建物を画す南北の溝と西側の溝が検出されている。建物規模は南北間の距離から南北21mと復元されている。

調査6は、東組町698番地他で昭和60年度(1985)に実施された。調査では平安時代後期に埋没した溝、桃山時代から江戸時代の掘込遺構、井戸、溝、江戸時代の井戸、ピットなどを検出した。出土遺物は平安時代前期から後期の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、桃山時代から江戸時代の土器類、瓦類、木製品(木筒類)、金属製品、石製品などがある。

調査7は、で昭和61年度(1986)に実施された。検出された遺構は奈良時代から平安時代の溝、井戸、掘込、鎌倉時代から室町時代の溝、柵列、掘込、ピット、桃山時代から江戸時代の門趾、井戸、掘込、溝などがある。出土遺物は奈良時代から平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、鎌倉時代から室町時代の土師器、瓦器、須恵質陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、桃山時代から江戸時代の陶器(瀬戸・美濃・信楽・備前ほか)、瓦類(金箔瓦含む)、木製品(木筒・漆器ほか)、金属製品がある。検出した奈良時代から平安時代の遺構は御香宮廃寺に関係したもので、桃山時代から江戸時代の門趾などは大名屋敷のものとする。

調査8は、今町659番地他の伏見中央図書館で昭和61年度(1986)に実施された。検出した遺構は平安時代前期の溝、土坑、桃山時代から江戸時代の井戸、土坑、建物、柵列、江戸時代中期以降の土坑などがある。出土遺物は平安時代前期の土師器、桃山時代から江戸時代の土師器、陶器、明染付、金属製品、木製品(木筒・漆器)がある。

調査9は、桃山町永井久太郎56番地で昭和61年度(1986)に実施された。検出した遺構は桃山時代から江戸時代の礎石建物、井戸、溝、柱穴、土坑がある。出土遺物は古墳時代の須恵器、円筒・形象埴輪、桃山時代から江戸時代の土師器、陶器、瓦類、鉄製品がある。古墳時代の須恵器、埴輪は伏見城築城時の整地層から出土しており、近隣に古墳が存在していたものとみられている。

調査10は試掘調査で、京町南七丁目35番地を昭和62年度(1987)に調査した。検出した遺構は桃山時代から江戸時代の整地土層、土坑、ピット、落込、掘込などがある。

調査11は、桃山町永井久太郎59-2番地で昭和63年度(1988)に調査した。検出した遺構は桃山時代の南北方向の石組溝、築地、犬行、路面、礎石建ちの建物、廊状遺構がある。出土遺物は桃山時代の土師器、陶器、有機物(焼米)、鉄製品、弾丸などがある。南北方向の石組溝ほかには旧伊達街道の東側溝に、礎石建ち建物は大名屋敷に伴うものとする。

調査12は、京町南七丁目35番地他で昭和63年度(1988)に調査した。検出した遺構は桃山時代から江戸時代の建物、塀、柵、井戸、土坑がある。出土遺物は古墳時代の円筒埴輪片、須恵器、

奈良時代から平安時代の須恵器、桃山時代から江戸時代の土師器、陶器、江戸時代の土器、陶磁器、瓦類がある。

調査 13 は、桃陵町 1 - 1 番地の京都市立桃陵中学校で昭和 63 年度（1988）に調査した。検出した遺構は弥生時代の方形周溝墓、奈良時代の建物、鎌倉時代の土坑、室町時代後半の溝、柱穴、桃山時代から江戸時代の建物、柱穴、土坑、掘込、落込、溝などがある。出土遺物は畿内Ⅱ様式の土器、5 世紀後半の円筒埴輪、朝顔形埴輪、桃山時代から江戸時代の土器・陶磁器、瓦類、木製品、金属製品がある。

調査 14 は、桃山町松平筑前 10 - 15 地で昭和 63 年度（1988）に調査した。検出した遺構は奈良時代の土坑、土器溜、室町時代の壕、柵列、溝、柱穴、井戸、土坑、桃山時代から江戸時代の整地層、礎石建物、掘立柱建物、柱穴、井戸、柵列、土坑がある。出土遺物は古墳時代の円筒埴輪、須恵器、飛鳥時代から奈良時代の土師器、須恵器、瓦類、鎌倉時代・室町時代の陶器、瓦器、桃山時代の土器、陶磁器、瓦類がある。

調査 15 は立会調査で、桃山町泰長老、本多上野、伊賀他を平成元年度（1989）に調査した。検出した遺構は桃山時代の石垣列、溝、土坑がある。出土遺物は瓦類、土師器などがある。伏見城の前身である指月城の御舟入部分を南北に調査して堆積土や規模を確認している。

調査 16 は、桃山町松平筑前 10 - 15 地で平成 9 年度（1997）に調査した。検出した遺構は奈良時代前期の掘立柱建物、井戸、溝、室町時代の溝（堀）、桃山時代の溝、柵列がある。出土遺物は縄文時代の石鏃、7 世紀後半～8 世紀初の土師器、須恵器、瓦類、室町時代の土師器、瓦器、陶器、瓦類、桃山時代の土師器、陶器、瓦類がある。奈良時代前期の遺構は御香宮廃寺に関する遺構で、矩形に折れ曲がる溝は寺域の東南コーナーを画する溝とされる。

調査 17 は、桃山町永井久太郎他地内で平成 10 年度（1998）に調査した。検出した遺構は桃山時代から江戸時代の東西石垣、石組溝、南北石垣、犬走、路面、溝がある。出土遺物は古墳時代の埴輪、須恵器、桃山時代から江戸時代の土師器、陶器、銭貨、石製品（石仏）、瓦類がある。

調査 18 は試掘調査で、桃山町立売 1 - 6 他を平成 10 年度（1998）に調査した。調査では桃山時代の落込、土坑状遺構、柱穴、溝状遺構を検出した。出土遺物は桃山時代の塩壺などがある。

調査 19 は、桃山町立売 1 - 6 番地地で平成 11 年度（1999）に調査した。検出した遺構は桃山時代から江戸時代の礎石建物、井戸、路面、側溝、江戸時代の路面、側溝、耕作溝がある。出土遺物は室町時代前半の土師器、瓦器、桃山時代から江戸時代の土師器、陶器、青磁、白磁、明染付、江戸時代の土師器、陶器、京焼などがある。

調査 20 は、深草大亀谷六躰町・万畳敷町で平成 14 年度（2002）に調査した。検出した遺構は江戸時代の礎石建物、溝などがある。出土遺物は江戸時代の土器、瓦類、土製品、石製品がある。

調査 21 は、下板橋町・鷹匠町・竹中町で平成 16 年度（2004）に調査した。検出した遺構は奈良時代の竪穴住居、土坑、桃山時代から江戸時代のピット、井戸、土坑、溝、柱穴列などがある。出土遺物は奈良時代の土師器、須恵器、桃山時代から江戸時代の土器、瓦類、鉄滓、鞆羽口などがある。

調査 22 は試掘調査で、桃山町大蔵地内伏見桃山城キャスルランド跡地を平成 16 年度（2004）に調査した。検出した遺構は桃山時代の土坑、堀、落込、柱穴がある。出土遺物は桃山時代の土師器、陶器、瓦類がある。

調査 23 も試掘調査で、桃山水野左近東町の京都市立桃山中学校を平成 16 年度（2004）に調査した。検出した遺構は桃山時代の整地土層がある。出土遺物は桃山時代の瓦類、江戸時代の土師器、陶器、染付磁器がある。

調査 24 は、竹中町 640 番地の京都市伏見区総合庁舎で平成 17 年度（2005）に調査した。検出した遺構は室町時代後期の溝、土坑、井戸、柱穴、桃山時代の整地土層、廃棄土坑、井戸、柱穴、江戸時代の溝、土坑、井戸、柱穴、墓地がある。出土遺物は飛鳥時代の瓦、奈良時代の須恵器、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、鎌倉時代から室町時代前期の土師器、瓦器、陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品、桃山時代の土器、陶器、明染付、木製品、江戸時代の土器、陶器、磁器、木製品、金属製品、土製品、瓦類、銭貨、人骨などがある。

文献（図 5 周辺調査位置図に文献番号が対応する）

- 1 吉村正親・磯田正康『伏見城跡発掘調査概報』1977（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977 年
 - 2 磯部 勝「伏見城跡 1」『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1984 年
 - 3 堀内明博・梅川光隆「伏見城跡 2」『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1984 年
 - 4 吉村正親「伏見城跡 1」『昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1985 年
 - 5 吉村正親「伏見城跡 2」『昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1985 年
 - 6 上村憲章・小森俊寛「伏見城跡 1」『昭和 60 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988 年
 - 7 原山充志・小森俊寛「伏見城跡 2」『昭和 60 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988 年
 - 8 平田 泰「伏見城城下町」『昭和 61 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989 年
 - 9 平方幸雄「伏見城跡」『昭和 61 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989 年
 - 10 長戸満男「伏見城城下町」『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991 年
 - 11 久世康博「伏見城跡 1」『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993 年
- 久世康博「伏見城跡（F D 32）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和 63 年度 京都市文化観光局 1989 年

- 12 小森俊寛・上村憲章「伏見城跡2」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 13 小森俊寛・原山充志「伏見城跡3」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 14 内田好昭・丸川義広・高橋 潔「伏見城跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 15 吉村正親「伏見城跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 16 前田義明「伏見城跡・御香宮廃寺」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 17 小松武彦「伏見城跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 18 桜井みどり「伏見城跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 19 桜井みどり・南 孝雄「伏見城跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 20 南 孝雄・出口 勲「伏見城跡」『平成14年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 21 平尾政幸『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-18 （財）京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 22 丸川義広「伏見城跡1」『平成16年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 23 モンベティ恭代「伏見城跡2」『平成16年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 24 山本雅和・大立目一・桜井みどり・能芝妙子・山口 眞『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-27 （財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 25 本調査報告

2. 遺 構

(1) 基本層序

調査区の地表面は東端が標高 41.40 m、西端部で 40.00 m、東西約 50 mを離して 1.4 mの比高差がある。近・現代の盛土層が 0.4 ~ 0.6 mで堆積し、西端では直接桃山時代から江戸時代の遺構面が露出する。旧地形は南東から北西への傾斜を示しており、桃山時代から江戸時代の整地土層が北西部で約 0.8 m、中間部で 0.2 ~ 0.4 m、南東部では整地土層は認められず地山(褐色砂泥)が検出される。整地土層は上下2層に大きく分けられ、上層が黄色系、下層が茶黄色系の堆積土からなる。遺構は整地土上層面で成立するものと、上層を除去後の下層面で成立するものがある。地山は褐色泥砂から黄褐色泥砂、明褐色泥砂へ徐々に変化し、地山上面から約 1.5 m下で、固く締まった角礫を密に混入する堆積層が確認できる。

(2) 検出遺構

調査で検出した遺構には、桃山時代から江戸時代の石組側溝、石垣基礎、礎石土坑 2 基、柵 6 列、土坑 4 基がある。

石組側溝(図 8、図版 2) 1 区西端で南北方向に検出したもので、延長約 17 mにわたって検出した。幅約 2 mの掘形で、その両側に径約 50 cmの石材を 1 段ないしは 2 段で組み、幅約 0.7 mの水路としている。水路底部には石敷きのある部分とない部分がある。南端部に南から北へ下が

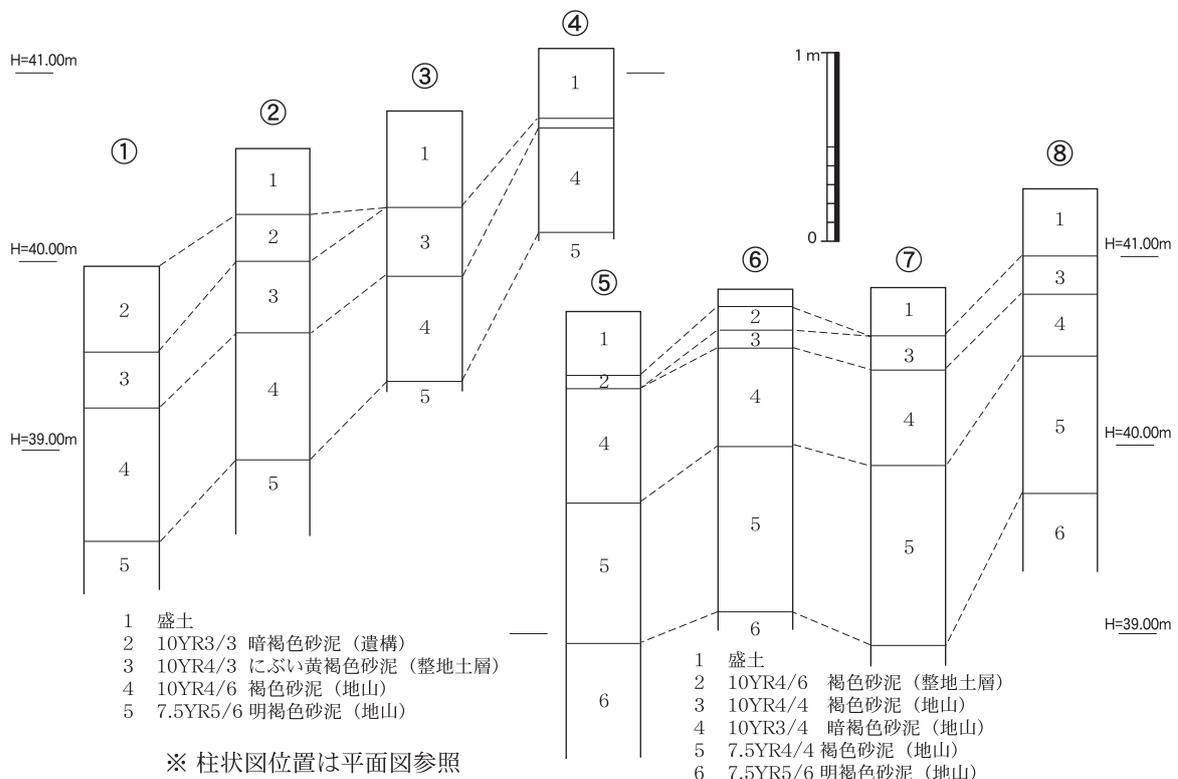


図 6 基本層序柱状図 (1 : 40)

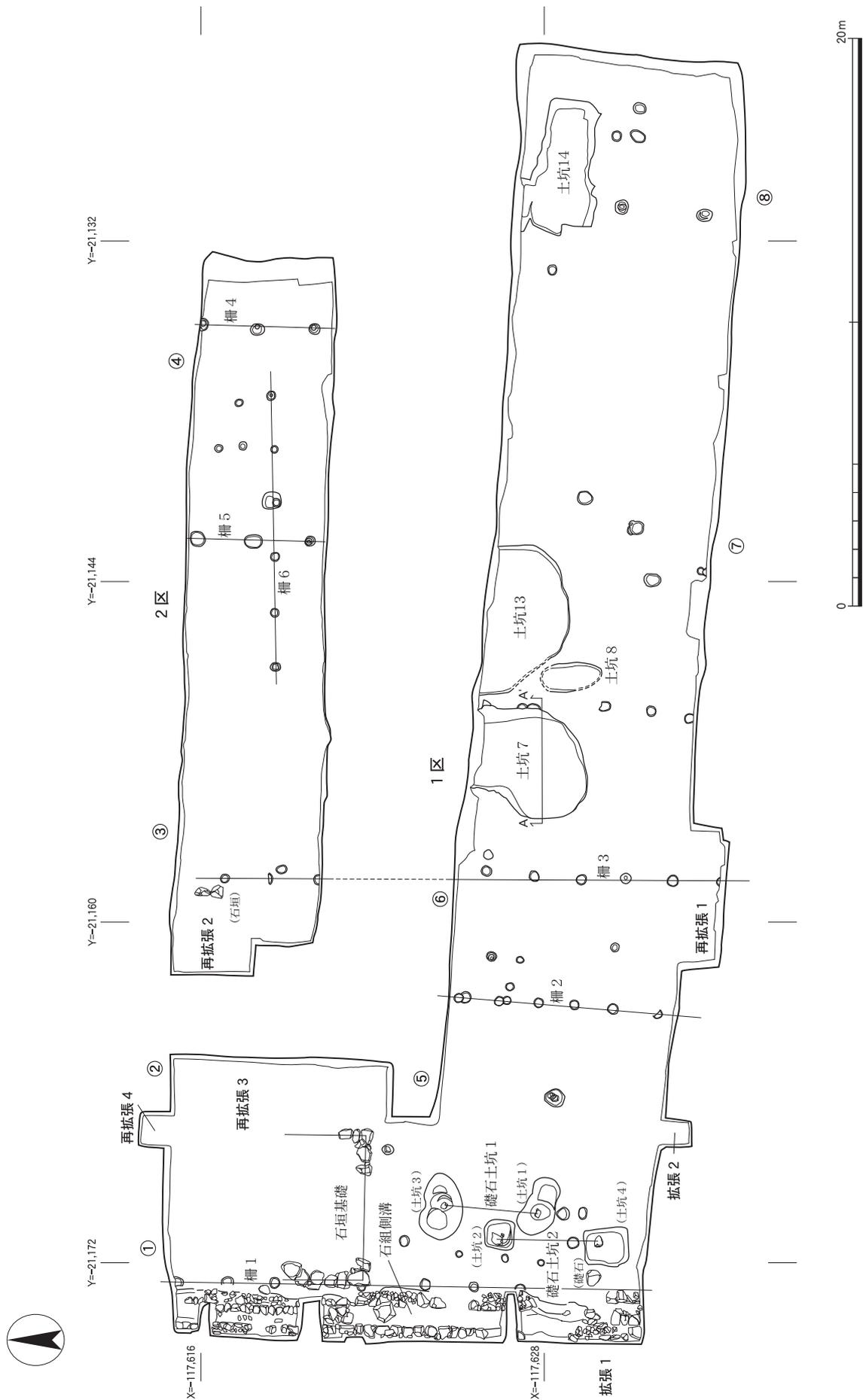


图7 調査区遺構平面図 (1 : 200)

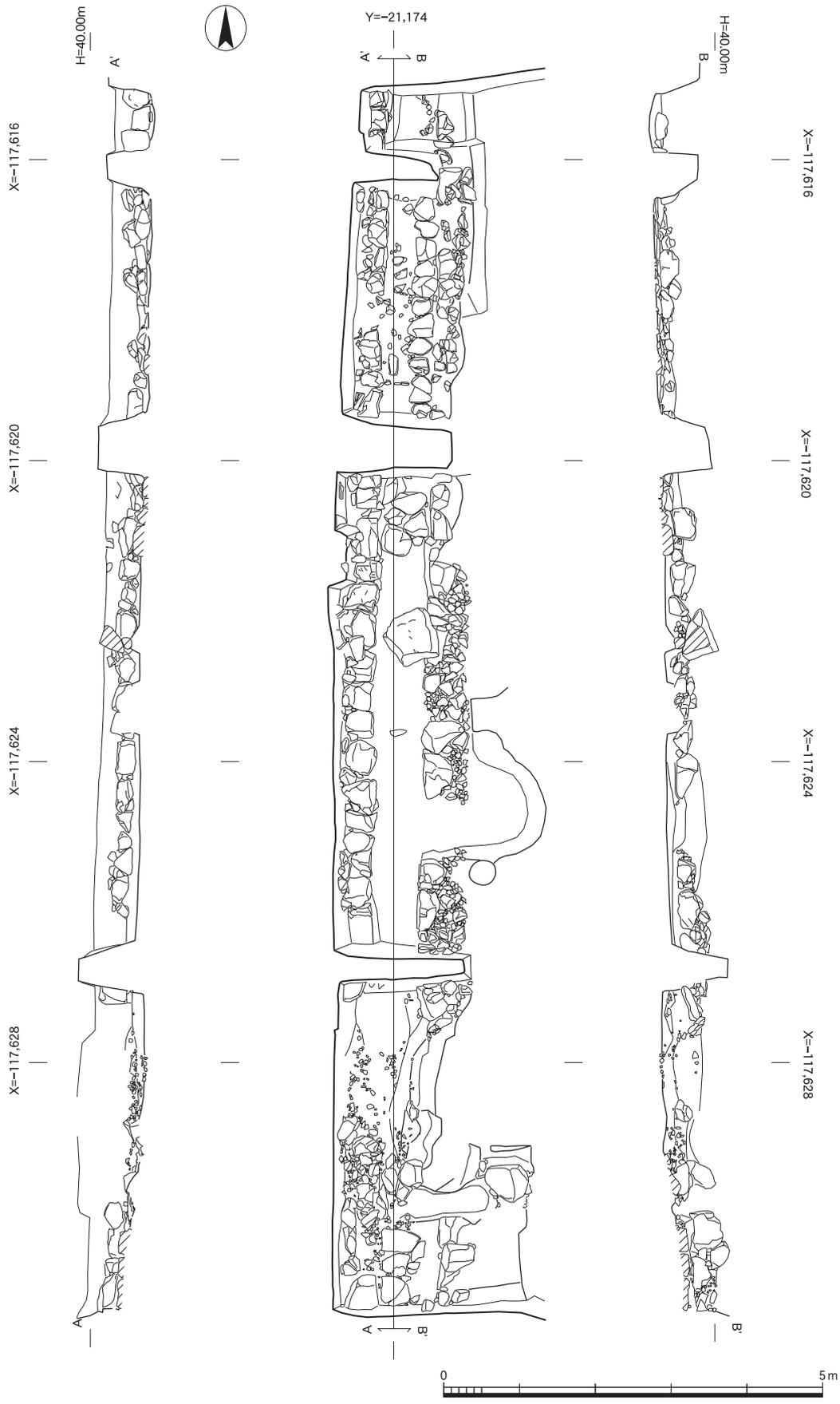


図8 石組側溝実測図 (1 : 80)

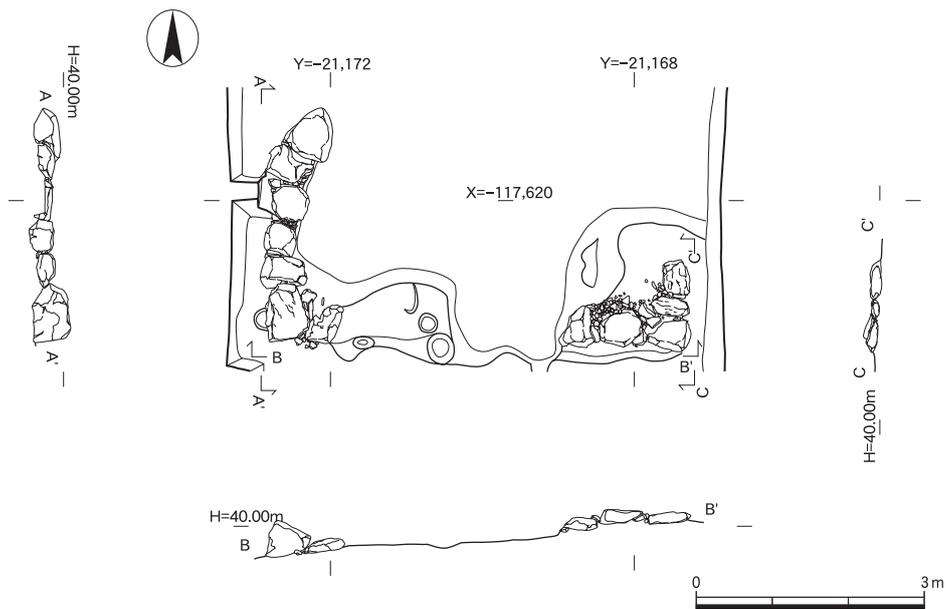


図9 石垣基礎実測図（1：100）

る段差があり、クランク部分が認められる。石敷きのある箇所は、この段差部分と石垣基礎の西面部分で確認された。側溝は側石上端から0.6 mで溝底面となり、この最下層に約0.2 mの褐色砂礫層が堆積し、その上面に約0.2 mの褐色粘土層が認められる。この上面は礫・瓦混じりの褐色砂泥層で埋められ、側石を含めて盛土層によって覆われる。

石垣基礎（図9、図版2）南西と南東のコーナー一部を検出したもので、径50～80 cmの石材を組んでいる。東西5 m、南北7 m以上とみられ、西面半ば付近で石材を内向きに配置した箇所が

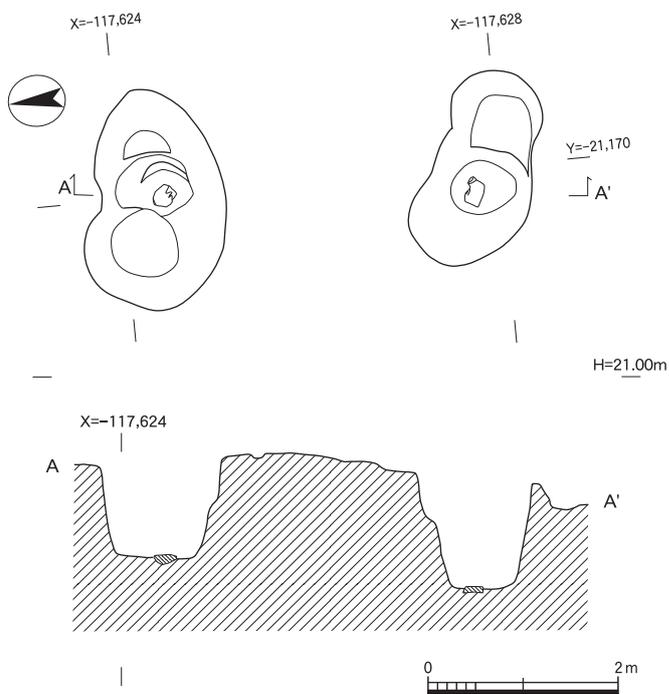


図10 礎石土坑1実測図（1：80）

認められる。北西に斜面を持つ地形のため、西面と南西部、北西部は石材を2段に組んで構築した可能性がある。

礎石土坑1（土坑1・3）（図10、図版3）1区西側に検出した。長径2.4 mと短径1.5 m、長径2.1 mと短径1.1 mの平面が瓢形をした2基の土坑が対になって成立する。それぞれの土坑の底面に、径約20 cmを測る礎石が置かれる。礎石下の根固め栗石は認められない。いずれも掘形深さ約1.0 mで、両礎石間は約3.3 mを測る。

礎石土坑2（土坑2・4）（図

11、図版3) 同じく1区西側、礎石土坑1のさらに西側で検出された。土坑掘形は隅丸方形で、径1.0 mのものと、長径1.5 m、短径1.2 mのやや長方形を呈する2基が対になっている。深さはいずれも0.6 mを測り、底面に径40 cm前後の礎石を据える。両礎石間は3.6 m。礎石下に根固め栗石は認められない。

柵1 1区西側、石組側溝の東際に検出した。柱穴は径0.3 m、深さ0.5 m以上で、南北に並ぶ。柱間は1.7 mを測るが、一部で2.2 mを測る柱間が認められる。一部の柱

穴が石垣基礎の石材下に検出されることから、石垣基礎の成立以前の遺構とみられる。

柵2 1区西側中央寄りに検出した南北方向の柵で、柱穴は径0.3 m、深さ0.5 m以上を測る。柱間は約1.4 mで南北に並ぶ。

柵3 1区西側中央寄り、柵2の東側約4.0 mを離して検出した。柱穴は径0.3 m、深さ0.5 m、柱間が1.7 m、南北に並ぶ。2区まで連続するとみられ、2区石垣遺構の東側に通る。

柵4 2区東側に検出した。柱穴は径0.4 m、深さ0.5 m以上を測る。柱間1.9 mで南北に延びる。1区では柱穴を検出していないので、南方向には延びないとみられる。

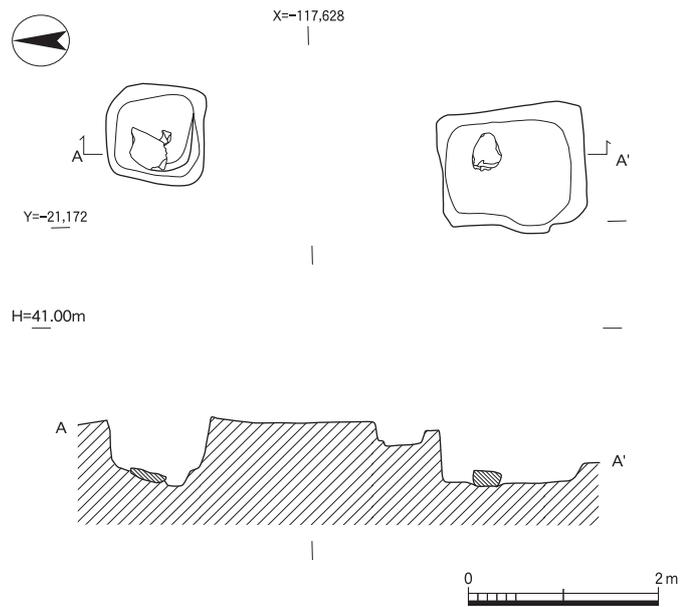


図11 礎石土坑2実測図(1:80)

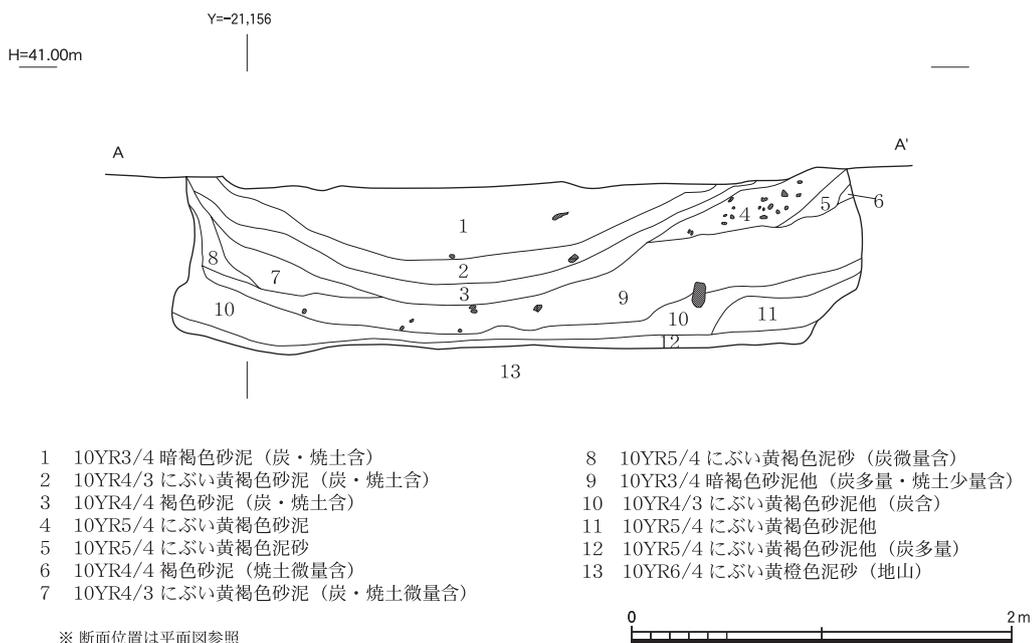


図12 土坑7断面図(1:40)

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
桃山時代	石組側溝、石垣基礎、礎石土坑2基、柵6列、土坑4基、柱穴	

柵5 2区東側、柵4の西側に検出した。柱穴は径0.4～0.7mを測る。柱間は1.9mで南北に延び、1区には続かない。

柵6 2区中央に東西方向で検出した。柱穴は径0.3m、深さ0.5m以上を測る。柱間は1.9mで、ほぼ柵3の北端近くまで延びる。

土坑7 (図12) 1区中央北寄りに検出した。平面形は繭状で、北調査区外に延びる。短径3.5m、長径4.0m以上で、深さは検出面から0.8mを測る。堆積断面はおおむねレンズ状を呈するが、土坑下層部で壁面に抉れがあり、雨水の滞留した痕跡とみられよう。

土坑8 土坑7の東で検出したもので、長楕円の掘形で、長径2.0m、短径1.0m、深さ0.6mを測る。

土坑13 1区中央、土坑7・土坑8の東側に検出した。平面はほぼ円形で、北半は調査区外に延びる。径5.0m、深さ0.5mを測る。

土坑14 1区東端近くで検出した。東西に長い長方形の掘形で、長径4.2m、短径1.8m、深さ0.5mを測る。土坑底部から土器類の出土が集中した。

3. 遺物

(1) 遺物の概要

出土した遺物には、平安時代の須恵器杯、桃山時代から江戸時代の土師器皿、施釉陶器、焼締陶器、明染付、瓦類、銭貨などがある。江戸時代から近代の遺物は盛土などから出土したもので、染付磁器、陶磁器などがある。

平安時代の須恵器杯は1区西側、整地土層から出土したもので、単一の遺構に伴い出土したものである。桃山時代から江戸時代の土師器皿は主として土坑14からまとまって出土したもので、他に陶器灯明皿、焼締陶器播鉢、明染付、銭貨がある。銭貨は「洪武通寶」、「寛永通寶」が出土した。寛永通寶は再拡張3の盛土層からである。

瓦類は軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦がある。礎石土坑1（土坑1・3）、礎石土坑2（土坑2）、土坑7、土坑8、土坑13、石組側溝、石垣基礎裏込、拡張区などから出土した。軒丸瓦の文様は五本骨扇に月丸文、巴文、菊花文、軒平瓦は唐草文があり、特に、土坑13からは五本骨扇に月丸文金箔瓦が出土している。

(2) 土器類（図13、図版4、表3）

土坑7からは土師器皿、施釉陶器碗・皿が出土した。1・2は土師器皿で、1は小振りのもので、口縁部を一段にナデる。2は口縁部を二段にナデて調整する。3は施釉陶器の天目形小碗で、

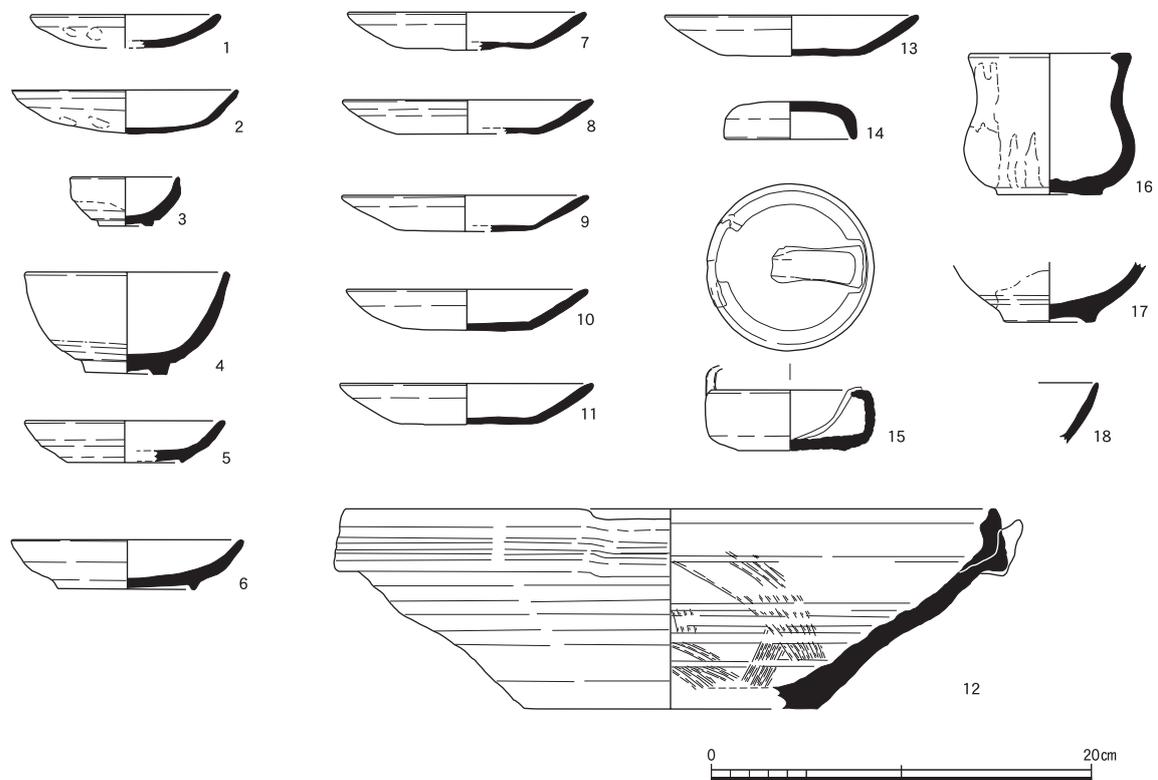


図13 出土土器実測図（1：4）

濃茶色の釉を内面と外面上半に掛ける。底部には断面四角の高台を削り出す。4は施釉陶器椀で、内面から外面下部に釉が掛かるが、二次加熱を受けて釉の変質剥落が見受けられる。断面四角の高台が削り出される。5は施釉陶器皿で、断面三角の高台を削り出す。

土坑13からは6の施釉陶器皿が出土している。底部に断面三角形の高台を削り出す。

土坑14からは土師器皿、土師質土器壺蓋、施釉陶器灯明皿、陶器播鉢が出土している。7～11・13は土師器皿で、底部は平坦で、体部は斜め上方に内湾気味に延びて、肥厚気味の口縁部内外を横方向にナデて収める。14は土師質土器壺蓋で、丸みを帯びた天井部から側縁が下方に短く延びる。15は施釉陶器灯明皿で、底部を窪ませ気味に削り、周縁に擬高台を造り出す。体部は膨らみ気味に上方に延び、口縁部は内側横方向に寝かせて端部を丸く収める。内側に見込みから口縁部に渡した芯置きを貼りつけ、対極に把手を付けるが、欠損する。12は焼締陶器播鉢で、平坦な底部は平坦で、体部は斜め上方に直線的に延び、口縁は上下に肥厚して外方に面を為し、端部は上方に摘み上げて丸く収める。口縁部の一端を外方に寝かせて注口とする。

再拡張4から16・17の施釉陶器が出土した。16は壺で、底部は薄く窪ませて擬高台を造る。体部下半は丸く内湾し、上半を外反気味に立ち上げ、口縁部は内外に肥厚、端部を上方に盛り上げて面を作る。上半に釉垂れがみられる。17は椀で、断面四角の高台を削り出す。体部下半は内湾して斜め上方に延びる。

18は1区西側整地土層の掘り下げで出土したもので、須恵器杯とみられ、底部を欠く。体部は内湾気味に斜め上方に延び、端部は丸く収める。器壁は薄く、胎土は精良である。

(3) 瓦類 (図14～18、図版4～6、表4)

瓦類は出土遺物の多くを占める。礎石土坑1では、土坑1が整理箱24箱、土坑3が17箱である。内訳は丸瓦と平瓦がほとんどであり、軒丸瓦は54点、軒平瓦は60点、飾り瓦などが7点ある。

軒丸瓦の内訳は、19と同範の五本骨扇に月丸文が34点、五本骨扇に月丸文の別範が3種3点出土した。巴文は6種6点、その他菊文1点、不明が10点出土した。合計すれば軒丸瓦は11種44点、不明は10点である。

軒平瓦の内訳は、23と同範軒平瓦が8点、24と同範軒平瓦が5点、25と同範軒平瓦が11点、30と同範軒平瓦が2点、31と同範軒平瓦が7点、32と同範軒平瓦が6点、33と同範軒平瓦が7点、29・37・38・44・45は各1点、計5点である。合計すれば12種51点、不明は9点である。

その他には、飾瓦が1点、埴1点、その他4点、不明1点が出土し、合計で7点である。

それらのうち残存状態の良いものを図示した。出土遺構別に述べる。

19～25は礎石土坑1(土坑1)から出土した。

軒丸瓦19～22は同範と考える。文様面の径は9～9.5cmを測る。文様は縦約6.5cm、横約7.5cmの扇があり、五本の骨がある。そのなかほどに直径約2.5cmの丸がある。いわゆる「五本骨扇に月丸」の文様である。

軒平瓦23は唐草文である。唐草は外郭線で形成し2反転する。中心飾りは上向きのC字形で、

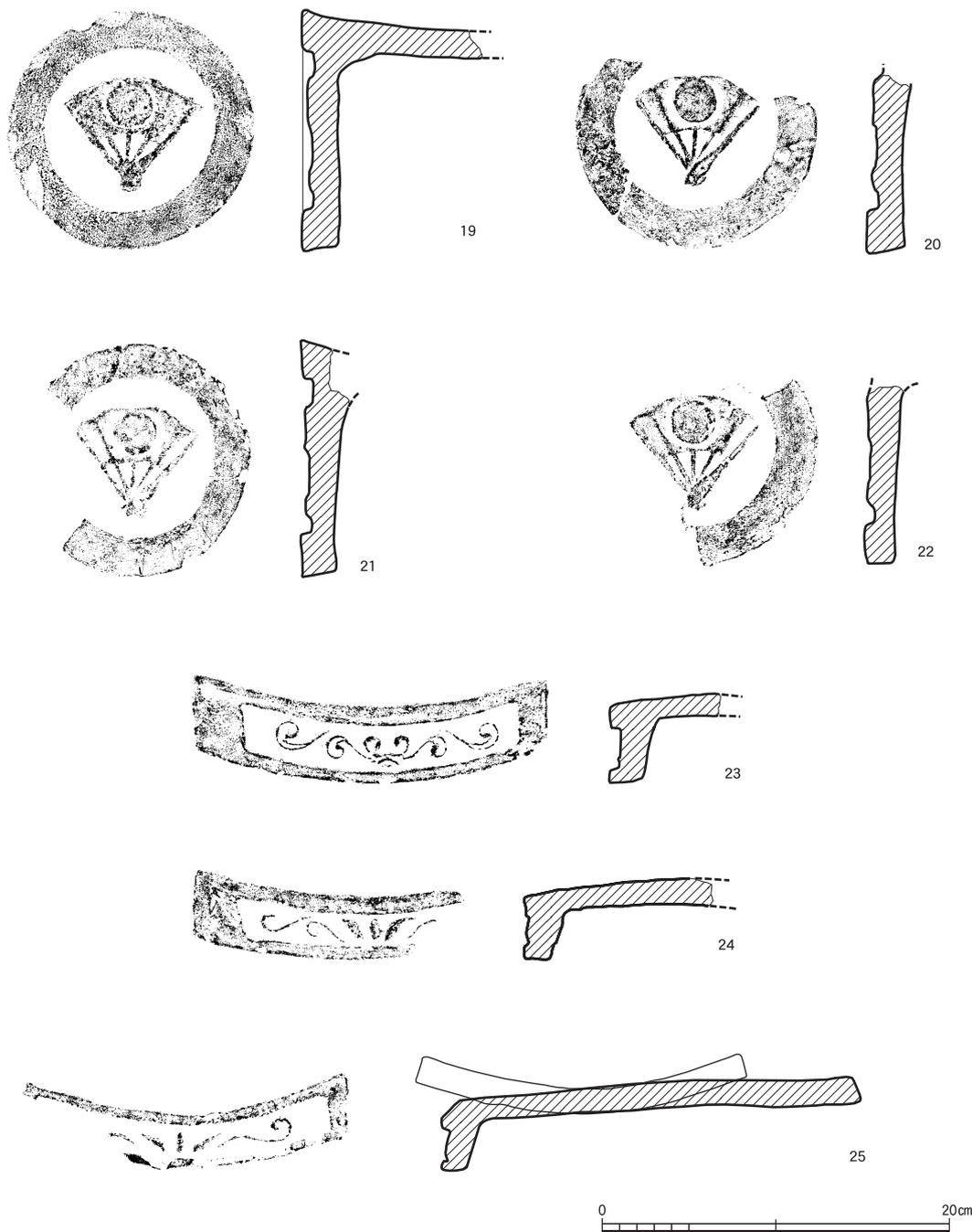


図 14 出土瓦類拓影・実測図1 (1 : 4)

下部に横向きの二葉がある。軒平瓦 24 は 2 反転する唐草文である。中心飾りは、上向きの三葉で、左右二葉が外反する。軒平瓦 25 は上向きに 1 反転する唐草文である。中心飾りは、上向き三葉で外反する。24 の中心飾りより少し大きい。平瓦部がほぼ残る。

26 ~ 32 は礎石土坑 1 (土坑 3)、33 は礎石土坑 2 (土坑 2) から出土した。

軒丸瓦 26 ~ 28 は 19 と同範とみられる五本骨扇に月丸文瓦である。

軒平瓦 29 は 2 反転と思われる唐草文である。軒平瓦 30 は 2 反転する唐草文である。中心飾りは上向きの三葉である。左右二葉が内湾し、下部左右に下向きに反転する子葉がある。軒平瓦 31

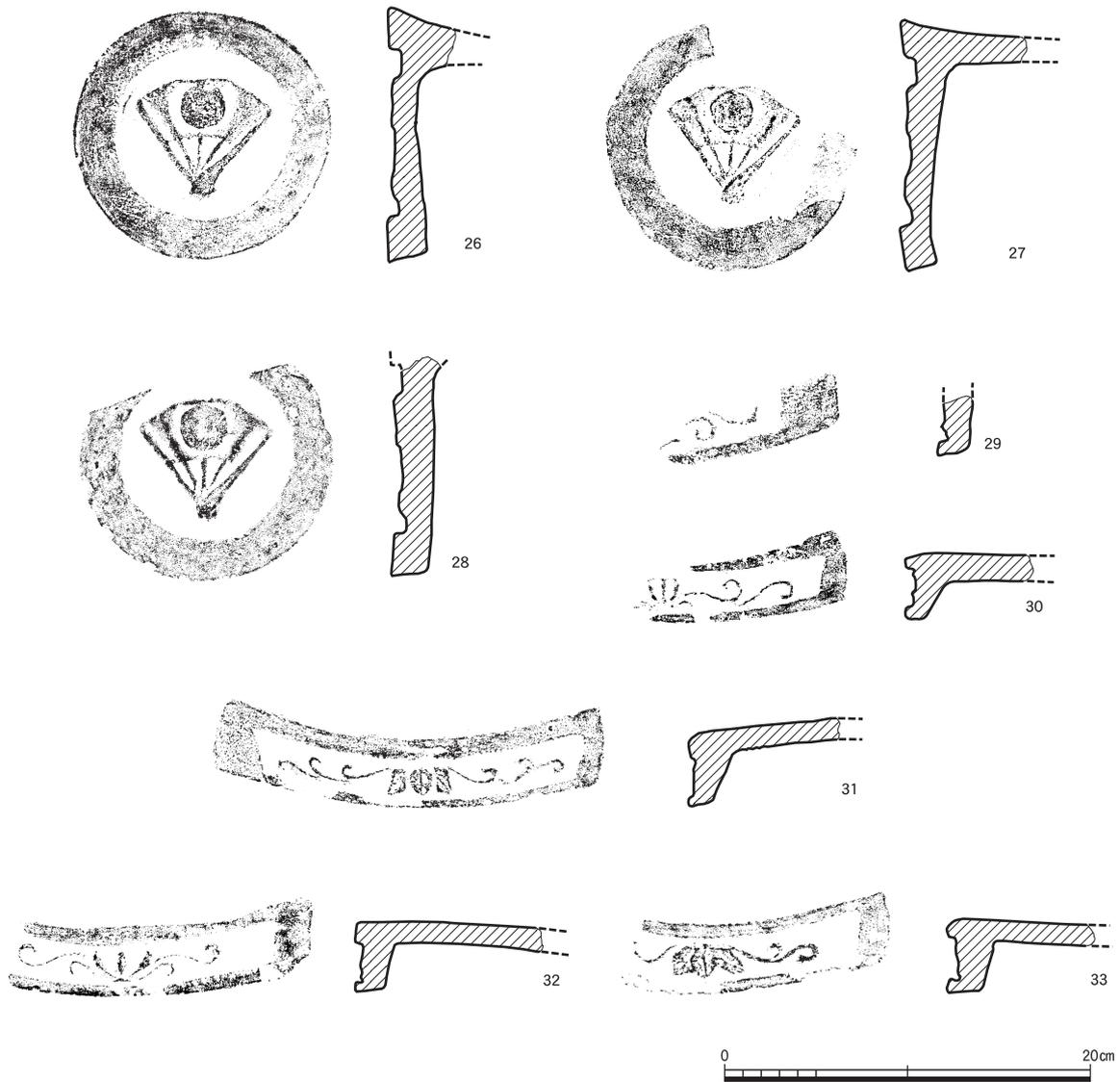


図 15 出土瓦類拓影・実測図2 (1:4)

は左右非対称の唐草文である。子葉があると考えれば2反転である。中心飾りは桐文である。軒平瓦 32 は2反転する唐草文である。中心飾りは三葉で内湾する。下部に横向きの一葉がある。

軒平瓦 33 は2反転する唐草文である。中心飾りは桐文である。31の桐文より少し大きく精緻である。

34～37は土坑7、38は土坑8、39は土坑13から出土した。

軒丸瓦 34 は19と同範とみられる五本骨扇に月丸文である。軒丸瓦 35 は巴文である。頭部が右巻き巴、珠文は推定16個である。軒丸瓦 36 は、頭部が右巻き巴文、珠文は推定16個である。軒平瓦 37 は2反転する唐草文である。中心飾りは花を模した五葉である。下部に小円が一つある。

軒平瓦 38 は2反転する唐草文である。中心飾りは外反する三葉¹⁾と思われる。

軒丸瓦 39 は19と別範の五本骨扇に月丸文である。文様面の径は約13cmを測る。扇は縦約9cm、横復元径は12cmである。そのなかほどに長径約3.5cm、短径約2.5cmの丸がある。瓦当面の周縁

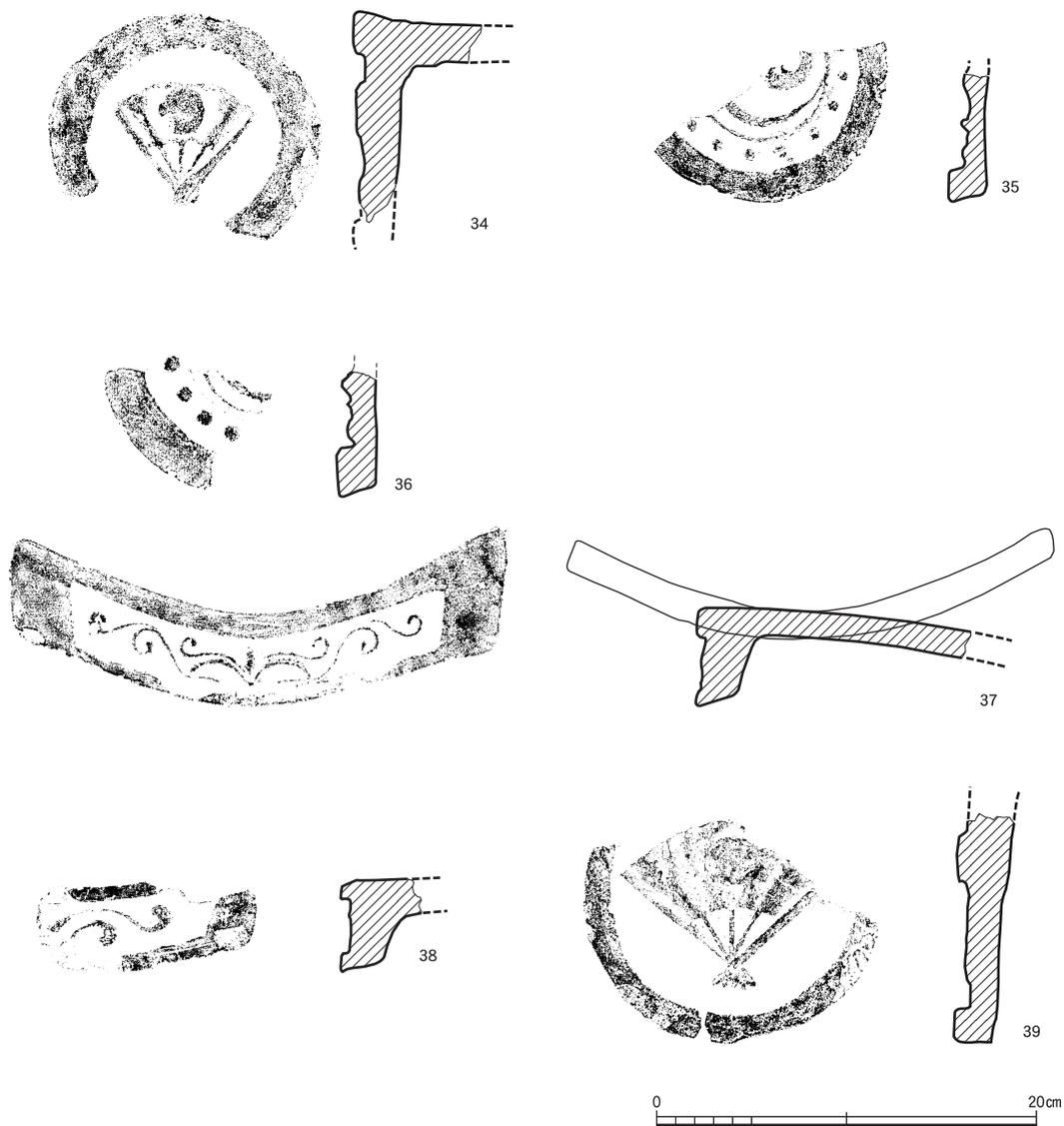


図 16 出土瓦類拓影・実測図3 (1 : 4)

や扇に金箔がわずかに残る。²⁾

40 ~ 42・44・45 は石組側溝、43 は石垣基礎裏込から出土した。

軒丸瓦 40 は三巴文である。頭部が右巻き、珠文は 16 個ある。軒丸瓦 41 は 8 弁重複花卉の菊丸である。復元径は 14 cm あり、いわゆる「小菊」としては大きい。軒丸瓦 42 は三巴文である。頭部が左巻き、珠文が推定 32 個である。軒丸瓦 43 は 19 と同範とみられる五本骨扇に月丸文である。

軒平瓦 44 は唐草文である。中心飾りは上向きの三葉であり、左右二葉が外反する。軒平瓦 45 は唐草文である。唐草は 1 反転し、唐草の中心が凹み輪郭を形成する。中心飾りは対向 C 字形で下部に三重の半円がある。他の軒平瓦より大きい瓦当面である。³⁾

46・49 は石組側溝から、47 は拡張 2、48 は 1 区東側から出土した。

軒丸瓦 46 は 19 と同範とみられる五本骨扇に月丸文である。菊文瓦 47 は裏に把手があること

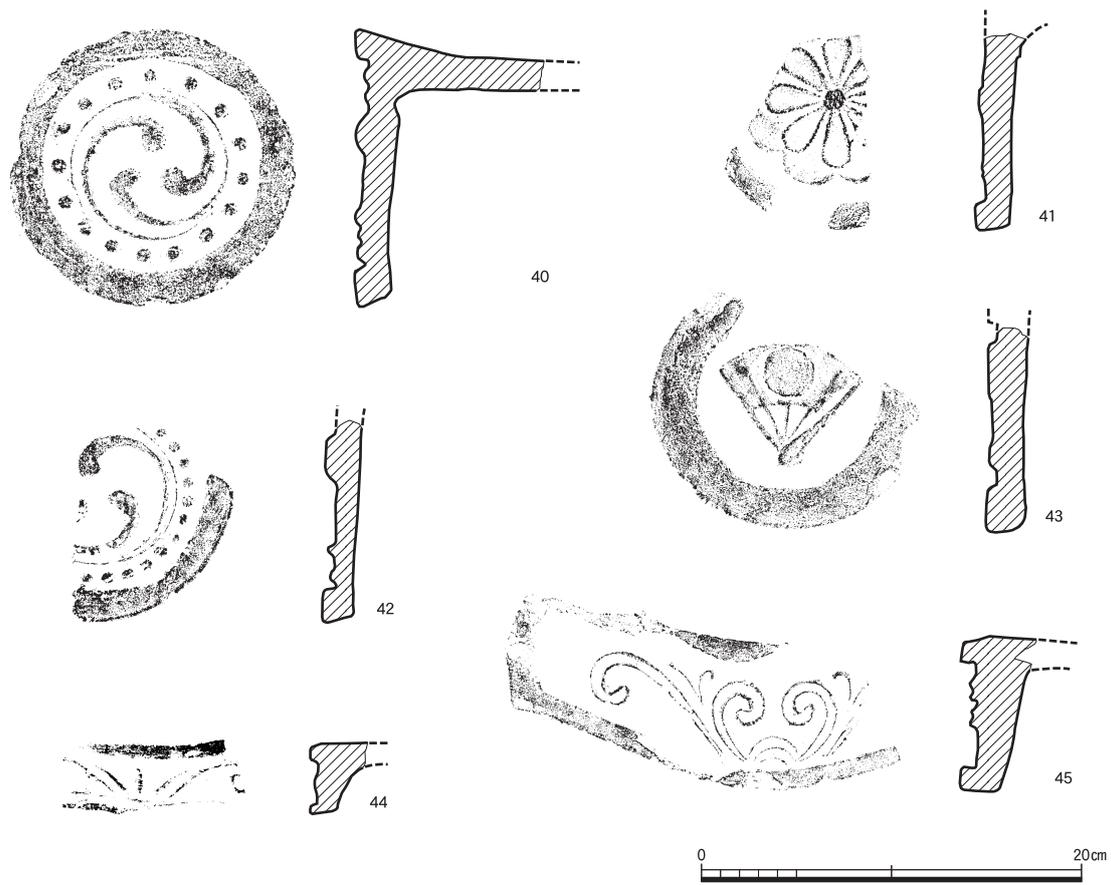


图 17 出土瓦類拓影・実測図 4 (1 : 4)

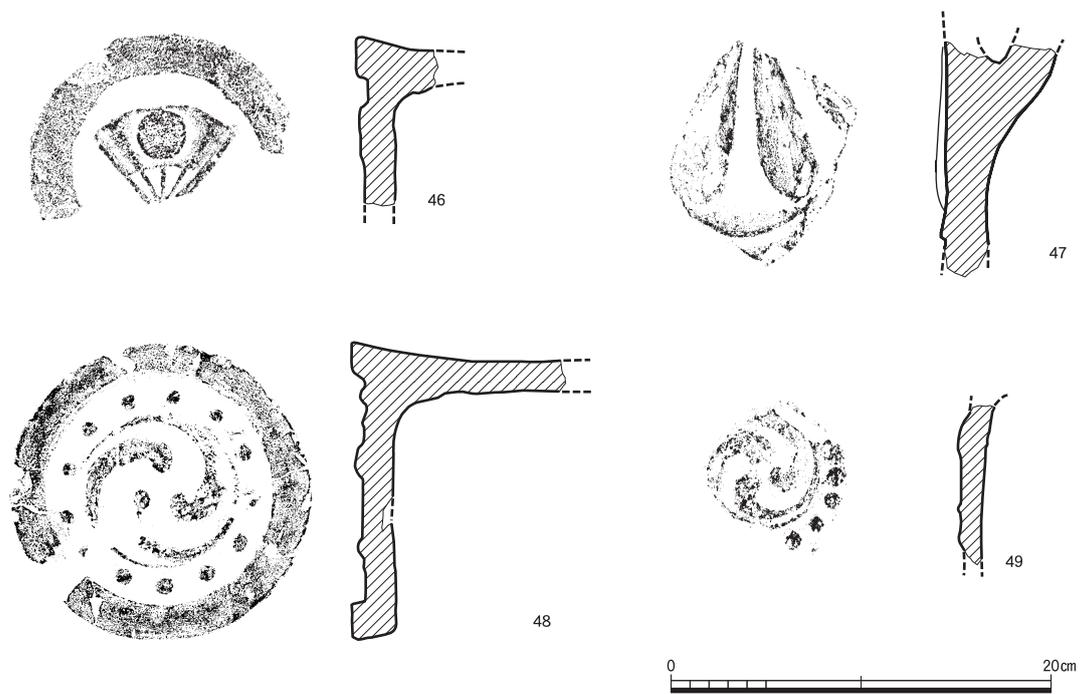


图 18 出土瓦類拓影・実測図 5 (1 : 4)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	須恵器		須恵器 1点		
桃山時代	土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、明染付、銭貨、瓦類		土師器 8点、土師質土器 1点、施釉陶器 5点、焼締陶器 1点、瓦類 29点		
江戸時代	施釉陶器		施釉陶器 2点		
合計		75箱	49点 (5箱)	6箱	64箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より11箱多くなっている。

から、棟などに使用する飾り瓦であろう。軒丸瓦 48 は三巴文である。頭部が右巻き、珠文は 13 個ある。軒丸瓦 49 は三巴文である。頭部が右巻き、珠文は推定 16 個である。

以上の所見から、軒丸瓦は五本骨扇に月丸文軒丸瓦が出土点数の約 7 割を占め、これが中心的な軒丸瓦であろう。軒平瓦は、中心飾りに五本骨扇に月丸文を配した柏葉軒平瓦がみられず、多種類の唐草文軒平瓦が出土していることから、五本骨扇に月丸文軒丸瓦とセットになる軒平瓦は、調査区近隣地では使用されなかったとみることができよう。金箔軒瓦は五本骨扇に月丸文軒丸瓦 39 の 1 点を確認できた。その他に、遺存状態が良好ではないため断定できないが、小片の巴文軒丸瓦が金箔瓦であった可能性⁴⁾がある。

註

- 1) 星野猷二・三木善則『器瓦録想 其二 伏見城』伏見城研究会 2006 年
1 伏見区豊後橋町の図中 54 と同範の可能性はある。
- 2) 註 1 に同じ
40 伏見区桃山福島大夫南町 64 の図中 1 と同範であろう。金箔瓦ではない。本調査地より南東へ約 200 m の地点で出土した。
- 3) 註 1 に同じ
9 伏見区桃山町泰長老の図中 38・39 と同範であろう。
- 4) 註 1 に同じ
巻頭図版、39 伏見区桃山町三河 48 から別範の金箔五本骨扇に月丸文軒丸瓦、五本骨扇に月丸中心飾り柏葉文軒平瓦が出土している。

4. ま と め

石組側溝は西側の道路沿いに検出したもので、伏見城期の道路（大和街道）に伴う東側溝であり、この直近で南北方向の柵1としたものは、柵ないし塀とみられる。

石垣基礎や礎石土坑は道路に近接した位置にあり、出入に関わる門と付随した施設を検出したものといえよう。

調査地中央で検出した南北方向の柵列と東西方向の柵列は敷地内を区画した柵であり、防御機能を合わせ持った施設とも推測できよう。同じく土坑は、粘土採取後に不用品を処分した廃棄土坑とみられる。

佐竹氏の家紋は五本骨扇に月丸紋であるが、これを瓦当文様とした五本骨扇に月丸文軒丸瓦が調査地内で多く出土した。調査地以外では2ヶ所での出土が確認されている。その一は調査地東南約350mを離れた桃山町三河で、昭和56年（1981）に2点が出土した。その二は桃山福島大夫町の区画整理事業で、昭和10年（1935）に1点が出土した。これは調査地南南東約200mの地点である。調査地を含めた佐竹氏の敷地は約120m四方と推定されるが、これを遥かに越えた地点での出土は興味深いものがある。しかしながら、本調査地での出土は軒瓦、丸瓦、平瓦を含めて数量的に多量であり、当地点で何らかの建物遺構に葺かれていた瓦類であることは否定し難い。上記2地点の瓦がいずれも金箔瓦であった可能性があることや少数であることから、屋敷廃絶後の移動としてよかろう。

伏見城の築城から廃城は以下のように区分される。

- 1、天正20年（1592）～文禄3年（1594） 指月城期。
- 2、文禄3年（1594）～文禄5年（1596） 拡張伏見城期。
- 3、慶長元年（1596）～慶長5年（1600） 再建伏見城期。
- 4、慶長6年（1601）～寛永元年（1624） 徳川伏見城期。

調査で検出した遺構の内、2の拡張伏見城期の縄張りと共に石組側溝、柵1が造作され、整地土層（下層）、石垣基礎、礎石土坑、柵5などは各大名への敷地配分の後に造作が始められたとみられる。焼土や炭片を埋土に含む柵2・3、柵6、土坑7・8・13・14などは4の徳川伏見城の関ヶ原戦後復興以後の遺構と捉えることができる。

表3 掲載土器一覧表

番号	器種	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	調整	胎土	色調	焼成	地区	遺構名	時代
1	土師器	皿	9.8	1.75	内面ナデ、外面ナデ	密	にぶい橙 7.5YR7/4	良	1区	土坑7	桃山時代
2	土師器	皿	11.8	2.35	内面ナデ、外面ナデ	密	灰白 2.5Y8/1	良	1区	土坑7	桃山時代
3	施釉陶器	椀	5.6	2.60	外面下半はナデとケズリ	密	灰白 2.5Y8/1	良	1区	土坑7	桃山時代
4	施釉陶器	椀	10.5	5.40	外面下半ケズリ	密	灰白 5Y8/1	やや軟	1区	土坑7	桃山時代
5	施釉陶器	皿	10.4	2.60	内面ナデ、外面ナデとケズリ	密	灰白 2.5Y8/1	良	1区	土坑7	桃山時代
6	施釉陶器	皿	12.0	2.65	内外面とも施釉	密	灰白 7.5Y8/1	良	1区	土坑13	桃山時代
7	土師器	皿	11.9	2.00	内面ナデ、外面ナデ	密	橙 5YR7/6	良	1区	土坑14	桃山時代
8	土師器	皿	13.0	1.80	内面ナデ、外面ナデ	密	にぶい橙 7.5YR7/4	良	1区	土坑14	桃山時代
9	土師器	皿	12.8	1.90	内面ナデ、外面ナデ	密	橙 7.5YR7/6	良	1区	土坑14	桃山時代
10	土師器	皿	12.6	2.20	内面ナデ、外面ナデ	密	にぶい橙 7.5YR7/4	良	1区	土坑14	桃山時代
11	土師器	皿	13.1	2.10	内面ナデ、外面ナデ	密	橙 5YR7/6	良	1区	土坑14	桃山時代
12	焼締陶器	播鉢	34.2	10.60	内面7~8条のスリ目底部ケズリ	密	にぶい赤褐 2.5YR4/4	良	1区	土坑14	桃山時代
13	土師器	皿	13.2	2.15	内面ナデ、外面ナデ	密	橙 7.5YR7/6	良	1区	土坑14	桃山時代
14	土師質土器	塩壺蓋	6.7	2.00	内面ナデ、外面ナデ	密	灰白 5YR8/2	良	1区	土坑14	桃山時代
15	施釉陶器	灯明皿	8.0	3.20	内面ナデ、外面ナデ、底部ケズリ	密	オリーブ灰 10Y6/2	良	1区	土坑14	桃山時代
16	施釉陶器	壺	8.4	7.50	内面ナデ、外面ナデ、底部ケズリ	密	にぶい赤褐 2.5YR4/3	良	1区	盛土	江戸時代
17	施釉陶器	椀	4.8	3.20以上	内面ナデ、外面ナデとケズリ	密	にぶい赤褐 2.5YR4/3	良	1区	盛土	江戸時代
18	須恵器	杯	—	3.25以上	内面ナデ、外面ナデ	密	灰 N5/0	良	1区	整地土層	平安時代

表4 掲載瓦一覧表

番号	種類	縦径 (cm)	横径 (cm)	調整	胎土	色調	焼成	地区	遺構名	時代
19	五本骨扇に 月丸文軒丸瓦	14.0	14.2	丸瓦部凸面ナデ、凹面布目	密	暗灰 N3/0	良	1区	礎石土坑1 (土坑1)	桃山時代
20	五本骨扇に 月丸文軒丸瓦	—	14.1	裏面ナデ	密	灰 N4/0	良	1区	礎石土坑1 (土坑1)	桃山時代
21	五本骨扇に 月丸文軒丸瓦	13.8	—	裏面ナデ、接合部にキザミ有り	密	暗灰 N3/0	良	1区	礎石土坑1 (土坑1)	桃山時代
22	五本骨扇に 月丸文軒丸瓦	—	—	瓦当面が灰白色部多い	密	暗灰 N3/0	良	1区	礎石土坑1 (土坑1)	桃山時代
23	唐草文軒平瓦	4.3	20.3	裏面は粘土を補足、強いナデ	密	灰 10Y4/1	良	1区	礎石土坑1 (土坑1)	桃山時代
24	唐草文軒平瓦	3.5	—	平瓦部ナデ、裏面接合部に強い ナデ	粗	暗灰 N3/0	良	1区	礎石土坑1 (土坑1)	桃山時代
25	唐草文軒平瓦	3.0	19.8	全長24.1cm、接合部強いナデ、 瓦当上端は広い面取り	粗	暗灰 N3/0	良	1区	礎石土坑1 (土坑1)	桃山時代
26	五本骨扇に 月丸文軒丸瓦	13.8	14.3	裏面ナデ、灰白色部多い	密	灰 N5/0	良	1区	礎石土坑1 (土坑3)	桃山時代
27	五本骨扇に 月丸文軒丸瓦	13.8	13.9	裏面補足粘土と瓦当面の接合部 にキザミ有り	密	暗灰 N3/0	良	1区	礎石土坑1 (土坑3)	桃山時代
28	五本骨扇に 月丸文軒丸瓦	—	14.2	裏面ナデ	密	灰 N4/0	良	1区	礎石土坑1 (土坑3)	桃山時代
29	唐草文軒平瓦	—	—	裏面ナデ	やや 粗	暗灰 N3/0	良	1区	礎石土坑1 (土坑3)	桃山時代
30	唐草文軒平瓦	3.2	—	瓦当上端は広い面取り	やや 粗	褐灰 10YR4/1	良	1区	礎石土坑1 (土坑3)	桃山時代
31	唐草文軒平瓦	3.5	21.0	平瓦部ナデ、裏面接合部に強い ナデ	密	灰白 N7/0	良	1区	礎石土坑1 (土坑3)	桃山時代
32	唐草文軒平瓦	3.9	—	平瓦部ナデ	粗	灰 N4/0	良	1区	礎石土坑1 (土坑3)	桃山時代
33	唐草文軒平瓦	3.6	—	凹面布目、幅1.5~1.3cmのタタ キ痕あり	密	暗灰 N3/0	良	1区	礎石土坑2 (土坑2)	桃山時代
34	五本骨扇に 月丸文軒丸瓦	—	14.3	丸瓦部凸面ナデ、凹面布目、裏 面接合部に強いナデ	やや 粗	灰 N4/0	良	1区	土坑7	桃山時代
35	巴文軒丸瓦	—	—	裏面外周に沿い強いナデ	やや 粗	暗灰 N3/0	良	1区	土坑7	桃山時代
36	巴文軒丸瓦	—	—	珠文は大粒(径1cm前後)	密	暗灰 N3/0	良	1区	土坑7	桃山時代
37	唐草文軒平瓦	4.8	26.4	平瓦部ナデ	密	暗灰 N3/0	良	1区	土坑7	桃山時代
38	唐草文軒平瓦	4.5	—	接合部にキザミ有り	密	暗灰 N3/0	良	1区	土坑8	桃山時代
39	五本骨扇に 月丸文軒丸瓦	—	15.6	裏面ナデ、外周に沿い強いナデ	密	暗灰 N3/0	良	1区	土坑13	桃山時代
40	三巴文軒丸瓦	14.7	14.8	丸瓦部凸面ナデ、凹面布目とケ ズリ、裏面接合部に強いナデ	密	暗灰 N3/0	良	1区	石組側溝	桃山時代
41	菊花文軒丸瓦	—	—	裏面ナデ、外周に沿いナデ	やや 粗	灰白 2.5Y8/2	良	1区	石組側溝	桃山時代
42	三巴文軒丸瓦	—	—	裏面ナデ、外周に沿いナデ	密	暗灰 N3/0	良	1区	石組側溝	桃山時代
43	五本骨扇に 月丸文軒丸瓦	—	14.2	裏面ナデ	密	灰 N4/0	良	1区	石垣基礎	桃山時代
44	唐草文軒平瓦	3.6	—	裏面ナデ	密	浅黄 5Y7/3	やや 軟	1区	石組側溝	桃山時代
45	唐草文軒平瓦	7.6	—	裏面はナデ、瓦当上端は広い面 取り	やや 粗	灰白 2.5Y8/2	良	1区	石組側溝	桃山時代
46	五本骨扇に 月丸文軒丸瓦	—	13.8	裏面はナデ、接合部もナデ	密	暗灰 N3/0	良	1区	石組側溝	桃山時代
47	菊花文飾り瓦	—	—	裏面ナデ	密	暗灰 10YR5/1	良	1区	拡張2	桃山時代
48	三巴文軒丸瓦	15.8	15.7	丸瓦部凸面ナデ、凹面布目とケ ズリ、裏面ナデ	密	暗灰 N3/0	良	1区	東側	桃山時代
49	三巴文軒丸瓦	—	—	裏面ナデ	密	灰 N4/0	やや 軟	1区	石組側溝	桃山時代

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふしみじょうあと							
書名	伏見城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2007-10							
編著者名	平田 泰・布川豊治							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふしみじょうあと 伏見城跡	きょうとし ふしみく 京都市伏見区 ももやまふくしまだゆう 桃山福島大夫 にしまち 西町1-2番地	26100	1172	34度 56分 22秒	135度 46分 06秒	2007年9月 25日～2007 年11月28日	597m ²	社員寮 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
伏見城跡	城郭跡	桃山時代	石組側溝、石垣基礎、礎石土坑、柵列		土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、明染付、銭貨、瓦類		佐竹氏の家紋、五本骨扇に月丸文軒丸瓦が出土	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-10

伏見城跡

発行日 2008年1月31日
編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961